

袖井 学会もいよいよ最終日で、誰も現れないのではないかと心配しておりましたが、たくさんの方にお越しいただきありがとうございます。「コミュニティにおけるアクションリサーチ—高齢社会の課題解決に向けて」というテーマで自主企画フォーラムを開かせていただきます。まず、アクションリサーチをはじめて聞くという方いらっしゃいますか。大体みなさんご存知ですね。アクションリサーチはまだ、特に老年学、老年社会科学の領域では知られていないかと思えます。自主企画を提出した背景をご説明しますと、RISTEX（社会技術研究開発センター）で「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」という秋山弘子先生が総括をされている領域で平成22年から3年に渡って全国に公募をかけて、コミュニティをベースにした高齢社会の諸課題を解決する研究を行うということでスタートしました。RISTEXの研究の特徴は、科学研究費と違って、研究費を出したらそれきりということはなく、それぞれのプロジェクトに領域アドバイザーが2,3人ついて、プロセスをチェックしていく。そして、研究グループと一緒に研究を推進していく。あるいは時には軌道修正をするという形で進めてまいりました。

ちょうどプロジェクトが始まって1年ちょっと経った時に、秋山先生から突如「アクションリサーチをやるべきだ。」と、お声がかかりまして、領域アドバイザーを中心としてアクションリサーチ委員会を立ち上げ、私、袖井が委員長に命じられました。恐らくアクションリサーチを少しでもご存知だったのは、今日の報告者の冷水先生や芳賀先生くらいではなかったかと思いますが。一からということで主として欧米の文献研究からスタートして、アクションリサーチを学んでまいりました。せっかくやっているのだから本にしたらどうかということで、東大出版会から本を出すことになりました。

その後、アクションリサーチを何とかしてもっと広めたいということで、老年社会科学会の理事長安村先生にもご相談して、自主企画で出したらどうだということで今日に至ったわけでございます。アクションリサーチについてはこれから冷水先生から詳しくご説明がありますが、簡単に言えば、単なる実証的な研究のほとんどが調査をして、それを統計的に処理して、結果を出すと言うのが大部分です。しかし、アクションリサーチは、現場の人たちと研究者が一緒になって現場の抱える課題解決をしていくという非常に実践的な研究方法で、多分老年学、あるいは老年社会科学の領域では今後必要とされる研究方法でないかという気がいたします。

アクションリサーチについては、教育学とか看護の領域で最近研究が進んでおまして、看護では例えば病棟を対象にして、看護師さんの看護体制を見直すですとか、勤労意欲を高めるとか、患者との関係を改善するといった研究が行われていますが、コミュニティという非常に広い範囲を対象にしたアクションリサーチはまだあまりないと言っていいかと思えます。そういう意味でアクションリサーチというのは特に高齢社会、人口の高齢化がどんどん進んでいく日本の社会、あるいは世界の他の

地域においても同じなのですが、コミュニティが直面する大きな課題、様々な課題を研究者が地域の人々、つまり住民とか住民団体とか自治体とか商工業者とかそういう方たちと一緒に協働して課題解決を行っていくという老年社会科学にとっては非常に新しい研究方法ではないかと思います。このフォーラムにおきましてはまず最初に冷水先生からアクションリサーチとは何か、特にコミュニティにおけるアクションリサーチとは何かというお話がありまして、その後実践例として、芳賀先生から首都圏を対象とするプロジェクトのご紹介と、兵庫県養父市という非常に高齢化が進んでいる地方の農村を対象としたプロジェクトを野藤さんにそれぞれ研究成果の発表と研究の途上において直面した諸課題、あるいは諸困難等についてご報告いただいて、その後で秋山先生からアクションリサーチ、特に老年社会科学にけるアクションリサーチの展望、将来性ということについてコメントいただき、そして最後に皆さま方からのご意見、ご質問をお受けしたいと思います。それでは早速冷水先生よろしくお願いたします。

冷水 過去の間人が亡霊のように立ち現れてきてまして。(会場笑い)

今袖井先生から導入的な話がされました。私は概説的にコミュニティにおけるアクションリサーチについて話したいと思います。特に老年学に基礎を置いている実証・実験研究と対比と言うことを中心にしてお話します。

※冷水先生、芳賀先生、野藤氏の発表内容につきましては報告書の発表資料をご覧ください。

袖井 ありがとうございます。アクションリサーチの研究者はまだ非常に少ないのですが、RISTEX のプロジェクトの参加を通じて野藤さんがアクションリサーチ研究者として育て、そして地域医療や地域包括ケアを地域にどう根付かせていくかという実践に移行していくという、まさに私どもの考えた理想が実現されているようでとっても嬉しく思います。最後に野藤さんがおっしゃったようにアクションリサーチに携わる研究者が増えることを念願しております。それでは最後になりましたが、秋山先生、コメントないしご意見をお願いいたします。

秋山 できるだけディスカッションの時間を取りたいと思いますので、簡単に私の考えていることを話させていただきたいと思います。私自身、今はアクションリサーチに取り組んでおりますし、アクションリサーチを科学的な方法論として確立したいと強く願って先生方と一緒に努力しているところですが、私自身は長年調査研究をやってまいりました。全国の何千人の方を 3 年ごとに追跡調査して、健康や経済状態、人間関係を加齢とともにどのように変化していくかを調べるとか、国際比較研究ということをやってきました。そうしますと高齢者を理解することはできるんです。自分の親だけではなく、国全体として、高齢者を把握する、理解することができますし、将来予測のこともできますから課題が見えてくるわけです。ところが、課題

を解決することに研究者として携われないということに非常に私はもどかしく感じておりました。結局、行政であったり企業がモノやサービスを開発することによって課題を解決していく。評価のところには少し携われるけれども、課題解決のところになぜ研究者が携われないかということに非常にもどかしさを感じておりました。私は社会心理学が専門なんですけれども、大学の社会心理学の研究室では自分も研究するし、学生も指導する。その時に科学的な研究であることが大切なんです。また科学的というのが曲者なんです、研究テーマ、方法論を選ぶ時に論文が書けるトピックでなくてはいけないんです。論文が書けるトピックというのは1つには科学研究費が取れるというような研究ということになるわけです。今の科学研究費というのは、多くの方は助成を受けていらっしゃると思いますが、非常に細分化しています。社会心理学、社会学、その中から非常に細かく分かれていて、その中でテーマを決めて、社会学の方法論に従って研究計画をつくるということになっているわけですね。とても社会の課題を解決するという研究はそういう形ではできない。そこで、科学のための科学ではなく、社会における科学<Science in Society>、社会のための科学<Science for Society>ということが国際的にも問われるようになりまして、JST の中に社会の仕組み、社会技術を開発していこうという社会技術研究開発センターが10年ほど前に新しくできて、そこで助成する研究は社会の課題を解決する。非常に細分化された分野ではほとんどのものは解決できない。ですからマルチステークホルダーで解決する。学問の中でいろいろな分野が連携することと同時に、行政区であったり、産業界であったり、住民の方とマルチステークホルダーで協働体制をつくって解決するということが全国に公募しました。まさにそれがアクションリサーチであるのです。先ほど冷水先生、芳賀先生、野藤さんからアクションリサーチの概説、そしてその事例をご報告しましたので大体のことをお分かりになっていると思います。私自身非常に強く感じますのは、老年社会科学が次の飛躍にとってアクションリサーチが非常に大きな貢献をするということです。アクションリサーチの導入、組み入れが非常に重要だと思っています。私がやってきた従来の調査研究や実験研究を否定するのでは全くありません。そういうものに加えて、アクションリサーチを1つの科学的な方法論として確立して、修士論文、あるいは博士論文にアクションリサーチを選ぶという学生が出てくるということ強く望んでおります。まだ野藤さんや芳賀先生のようなアクションリサーチに本格的に取り組んでいる方は少数なんです。少数であってもこれからネットワークをつくって、そして情報交換、経験を交換と共有していくことがこれから必要だと思っておりますし、できれば将来は学会も必要だし、ジャーナルもあるといいなと思っております。アメリカではジャーナルもできているわけです。とりあえずは「老年社会科学」の編集方針の中にアクションリサーチを取り入れるということでぜひご検討いただきたいと強く願っております。まずは論文が出てこない編集もでき

ない、査読もできないわけですよ。そういう意味でアクションリサーチで論文を書くということの難しさと面白さがあると思います。芳賀先生の場合は博士論文のご指導をされる中でどんなご苦労があったかということも少しディスカッションの中でお話いただきながら、皆さんでこういう議論ができればいいなという風に思っております。以上です。

袖井 どうもありがとうございました。「老年社会科学」という学会誌、あるいは今回の大会のポスターセッションを見ましても、どちらかというと統計分析の研究が多いですよ。アクションリサーチはもちろん、先ほどの冷水先生のご報告にもありましたが、量的な調査を否定するものではないのですが、主として質的方法をかなり重視するので、できれば老年社会科学研究そのものにおいてもっと質的研究を重視されてもいいのではないかなと私は個人的に思っております。それでは、質問とか意見がありましたらどうぞ遠慮なく。

会場 秋山先生ほどではありませんけれど、量的な実証研究ばかりやってきて、その立場から言うと、それぞれ立派なアクションリサーチをやっておられることはわかるけれど、それを例えば論文に書いて、査読を通すということにはある特定の方法論の洗練がどうしても必要なんだろうと思うんですね。そのところがまだ足りないかなという気がします。というのは、かつてわれわれの時代には事例研究と呼ばれる研究があって、それが様々な方法論的な洗練を経て、質的研究として現在アクセプトされるようになってきている。あるいは、アクセプトされつつある段階になってきたかということだと思うんですね。アクションリサーチに関しても、やはり、方法論の確立がないと、「その地域ではうまくいったんですね、おめでとう。」で終わってしまう。そこは何とか先生方にやっていただきたいと思うところです。希望です。

秋山 まさに、本が9月に出版されますが、アクションリサーチを科学的な方法論として確立するのにここまでできるというはじめてのステップで、次のステップとして更にといいところなんです。おっしゃるところはまさに私たちも一番大きな課題と考えております。どうぞ応援して関わってください。

冷水 ご指摘よく分かりますが、しかし、アクションリサーチを進めていくことには賛成だという基本の上で聞かれていることだと思います。そういう意味では歓迎したいと思いますが、確かに研究方法というものが、欧米でも博士論文を書くためのハンドブックが出ているんですよ。そういうものを翻訳して日本流に修正するとか、そういう努力はやはり研究者側でしていく必要があるなということで、その責任は我々RISTEXグループが先導しなければいけない。しかし、歳が間に合うかなという気がします（会場笑い）。もう1つは、実証的な研究方法と対立するのではなくて、それを取り込みながら、しかし新しいアクションリサーチの方法を開発するという。欧米でもジャーナルはあるけれども、そういう点での、例えばコミュニティ

の変化を把握するという風なことはなかなか難しい。だけど、野藤さんの発表で記述的ですけども、一定のこういう風にコミュニティが変わっていったということが示されていますよね。そういう形での方法の開発というのが非常に重要だと思っていますので、ぜひ一緒に尽力をしていただきたいということで終わりたいと思います。

袖井 ぜひ東大出版会の本をお買い求めいただきたいと思います。

芳賀 おっしゃることはごもっともで、そこを打破しなくてはいけないと思っています。何故そこでたまたま起きたんだということですが、それはそこでしか起き得ないことなので、いわゆる自然科学的な実証研究と違うのは認めていただきたいのですが、他の地域でもそのまま当てはまることはありえないと私たちは考えています。だけど、いかにして他のコミュニティに波及させることができるのかと、そのことに重点を置いています。波及させられるためには誰が見てもその動きが多面的に見て取れるということではないかと思っています。元々主観と主観のぶつかり合いですから、見えないところもあるのですが、しかし、データのトライアングレーション¹ということで多面的なデータの取り方をします。こちらから光をあててこう見える。こちらからはこう見える。トータルとしてどう見えるのか、必ずしもその光のあて方によって同じに見える必要はないのですけれど、そういう多面的に画が描ける。そのためにはプロセス評価のところを大事にして、データをどのように整えて、どのように誰が分析したのかということをしちっと論文に書く必要があるのではないのかなと、私自身が学生指導の中で一番大事だと思っているのです。しかしどのように書けば、それが形として皆さんに理解してもらえるのかというところまでは至っておりませんで、いろいろ試行錯誤しているところでございます。以上です。

会場 野藤先生にお伺いしたいのですが、今の話の流れで秋山先生の最後におっしゃったところと今のディスカッションを含めて、若手研究者、私自身もポストドクで若手研究者ですが、成果を出すことに非常にプレッシャーを感じる中で、アクションリサーチという新しい分野、成果を出すにはかなりのエネルギーがいる分野に取り組まなければいけない。その部分のところどういう気持ちの折り合いをつけるなり、どういうモチベーションでやっているのかをもう少し詳しく教えていただければなど。

野藤 若手研究者ならではの悩みだと思うのですが、私はポストドクで3年間JSTからの予算で雇用されていたので、JST終了とともに仕事がなくなるという立場で、3年間に業績を上げなければ次の保証がないと相当焦りはありました。やっぱりすぐに論文は書けないです。実証研究ほどに簡単に論文は書けない。時間もかかるし、相手のあることだからこちらの一方的なスピードで進められないということで、もう覚悟を決めました。論文はすぐに書けなくてもいい。でも、それ以上に得るものがある

¹ トライアングレーション…データの収集と分析の信頼性を高めるために、1つの研究において複数の異なるデータ収集法と分析法を用いる研究法。

とあって 3 年間はこれに捧げたいと思って、そのような気持ちの折り合いをつけて臨みました。周りからはだいぶ心配されました。論文が書けなくていいのかといわれたのですが、それ以上のものを得たと今思っていますので、論文をこれから書いてみたいと思います。

袖井 この本に野藤さんがアクションリサーチの醍醐味ということでその辺のことを書いていますが、アクションリサーチの魅力のひとつは、研究者として第三者的に上から見るのではなくて、本当に地域住民と一緒に盛上げていくというそういう高揚感とかワクワク感があるというところではないか。そのために論文が書けなかったかもしれないけれど、それ以上に野藤さんが得たものは大きかったのではないかと考えています。

秋山 本を読んでいただくと、第 5 章にアクションリサーチの論文の書き方という章がございまして、そこではどんな風に章立てをして、どんな風に書いていくか、最後にチェックリストもございまして、ぜひそういうものを参考にして論文を書いてみてください。私たちは JST-RISTEX で 15 のプロジェクトを助成しています。そこから若手の人たちに論文を書いてもらって本を出したいなという風に思っています。今度教科書が出て、それを少し参考にしながらぜひ論文制作にチャレンジしていただきたいなと思っています。シニアも書きますから。若手だけでなく(会場笑い)。

袖井 小川先生、実際にプロジェクトを推進されてご意見ありますでしょうか。

小川 私の場合は領域の最初のプロジェクトとして採択いただきました。私はもう若手ではなかったのですが、論文を書かなければというプレッシャーよりもむしろ現実の問題解決をどう図るかのプレッシャーの方がはるかに大きかったですけれど、そういう取り組みを通じて、領域アドバイザーからアクションリサーチとは何かということも学ばせていただいて、大変ありがたかったなと思います。今も問題解決にむしろ走っている中で、持っているデータをどうまとめていったらいいかというところに非常に迷い、悩みがございまして、この本も読ませていただきながら、ご指導いただきながら、秋山先生がおっしゃったシニアも頑張るといふところに入っていると思うので、頑張らせていただきたいなと思います。

会場 私は分野が違って、開発人類学といってケニアでフィールドワークをやっていて、国際協力に関わっているのですが、そういった意味で今日のお話というのは、フォーカスグループディスカッションをしてニーズを把握して、それを活動にしてアクションを起こしていくというのが似ているのかなと思って拝聴しておりました。9 月に発売になる本の終章のチャプターに入っているのをそれを買えば読めるのかなと思うのですが、アクションリサーチというものが、例えば野藤さんのようにパッションがあって、JST が人件費を持ってきて、そういう人がマインドを高く持ってコミュニティに入って、ファシリテータであり、フォーカスグループディスカッションのところでマネジメントをしていくという能力も問われるのではないのかな

と。単にポスドクをとりましたというよりも、むしろローカルに入って、一言も漏らさず話を汲み取っていくみたいなそういったスキルが求められるのではないかなと思うのですが、リサーチャーの養成のところをどう考えているのか、どなたかお答えいただければありがたいです。

袖井 終章のところは私が書いたのですが、アクションリサーチャーはスキルだけではなくて、天性のものも必要だと欧米の人は言っています。非常にオープンマインドで忍耐力があって、そして人の話を聞くという資質が求められます。アクションリサーチの先行研究には発展途上国における研究がたくさんあります。例えば、識字教育がその一例で、バングラディッシュのような非常に貧困なところで女性たちに識字教育をするというのがあります。アクションリサーチャーにとって一番重要なのは、コミュニケーション能力ではないかと思います。もちろん学術的な先行研究を読んで努力をして知識を積み重ねることも必要ですけど、コミュニケーション能力は非常に問われますね。コミュニティに溶け込んでいく能力が問われるのです。野藤さんにはすごくその能力があるかと思います。

会場 人類学も現地のフィールドワークをして書くというのが主な目的なので、アクションを起こして、その後アクションがどうだったかというところはなかなか論文にかけないというところに自分でジレンマがありましたのでお伺いしました。ありがとうございました。

芳賀 私の経験から確かに野藤先生のように素質がおありの方がメンバーにいればいいのですが、いない場合というのももちろんございます。じゃあ研究できないのか。そんなことはないと思います。そういうファシリテートを得意とする方をお願いをして、場合によっては研究者なら共同研究で、賃金でお願いするというやり方もあると思いますね。ですから、研究者の中にそういった資質の方がいないようであれば、引き込むか依頼をするかが必要です。むしろ過剰に研究者の能力を誤ってしまって、全体をファシリテートできなかったという方が最悪です。ここはファシリテートの自信がない方はぜひそういう専門家をお願いして。もちろんお願いすればいいのかということではなくて、研修を受けてそういったノウハウを身につけるといことも先生方には必要ではないかと思います。

袖井 他に質問はありませんでしょうか。アクションリサーチをやってみたいと思われる方、おられますか？後ろで二人くらい手が挙がりました。どうぞ。

会場 研究者と地域と行政をつなぐといった時の特に行政を説得していく時の方法、行政にその気になってもらうというのがなかなか難しいところがあるように思うのですが、今回事例紹介してくださった先生方はどのようなアプローチで行政の協力を取りつけていったか教えていただきたいと思うのですが。

芳賀 行政と協力しなくてもできるアクションリサーチもあると思いますが、今日のようにコミュニティがどう変化したかということになりますと、かなり行政が味方にい

たほうがいいなと思ひまして、私もそういう意味では非常に苦勞しております。基本的に、まず行政は断ると思ひますね。「余計なことはしたくない。」と。私たちが特に必要なのは住民の情報なんです。どこに誰が住んでおられるのかという。アンケートするにしてもそこに住んでいる人の情報は持たないので、行政の協力は必須と思ひています。行政と本当にチームを組むのであれば、その担当の方に分かってもらうべく説明しなくてはならないし、それが了解してもらえないならしょうがない。非常に長丁場で本来の業務以外の余分な仕事になりますので、そこは人によるかなと思ひます。

秋山 私たちは柏で長寿社会のまちづくりということで色んなプロジェクトをやってきましたけれど、本当に行政との連携体制をつくるのにかなりの時間がかかりました。これだったら何課と言われて、同じ説明を何回もすることになりました。そのうちに共鳴するキーパーソンというのが出てくるんですね。そのうち「これやってみよう。」と一肌脱いで汗流す人が出てくると、その人を軸にして広げていくというのは可能だなと。他にも鎌倉や大槌でもやっているのですが、そのことはかなり一般的に言えるのではないかと思ひます。キーパーソンをどうやって見つけるかということ。それにはかなり時間もかかると思ひます。もう 1 つはアクションリサーチをやって、「このコミュニティではよくできましたで終わり。」じゃないかと言うが、決してそれだけでは終わっていないのです。例えば小川先生のプロジェクトは ICT を使って生活支援のネットワークをつくるというのを岩手県でなさいましたけれど、今はうちでもやりたいという形で四国とか色んなところでやられています。全く同じことはできなくて、少しずつその事情あった形に調整しながらやっている。今日冷水先生からご紹介いただいた「セカンドライフの就労プロジェクト」は共通の課題なんです。都市部で企業の定年退職者が元気なのに行くところがない、することがない、話す人がなくて家でテレビを見ているというすごくもったいない状態だし、本人の健康にとってもよくない。それをどうにかしたいというのは何も柏だけの問題ではなくて、ベッドタウン全ての問題だし、他のところにもある。これをマニュアル化しました。仕事をどうやって地域につくるか、セカンドライフのもっと融通の利く新しい働き方のマニュアルをつくって他のところにも広げていくというのをやっている。すると厚労省もそれに目をつけて、これを全国に展開していかうということで制度化していく。政策提言をするのだけでも、こうやればできるというエビデンスとなるマニュアルもつけてというのをやっている。1つのところでやったらそれで終わりということではなくて、1つのインパクトを持つ研究のやり方としてアクションリサーチは非常に有効だということを感じております。

冷水 今のことと同じなのですが、研究プロセス 4 段階あって、研究プロセスには含まれないその後その研究で出てきたプロセスや方法、結果、それらを他のコミュニティに波及していくための条件、こういう条件があれば波及していきますよというこ

とを設定し、報告するということが私たちのアクションリサーチでは非常に重要なポイントであるという風に考えています。それは秋山先生の説明で生きがい就労の場合でも中間支援組織というのはどういう風につくるかということがマニュアル化されているんですね。それを使えば同じようにはできないが、他のコミュニティで参考にして同じようなことをやってみることができる。野藤さんのプロジェクトでもツールやマニュアル（「健康応援手帳」と「指南書」）を作っています。それを他の地域で実際にやってみることができるようなものを出すという。これまでの実証研究ではそういうことはなかったと思うんです。研究のやり方は違う意味であったと思いますが、実際他の地域でアクションをやってみるための条件、そういうものをどうつくっていくかということが先ほどの研究方法の開発とともにアクションリサーチの重要な特徴だと思いますので、そのところをぜひ理解していただきたいと思います。

会場 「その地域でうまくいってパチパチ」と言ったのが少し誤解されたようなのではっきりお断りしておかなくてははいけないと思いました。マニュアルをつくってほかの地域へ波及させるステップが大事だという冷水先生のお話は全くその通りだと思って、全く反対ではありません。ただ、そのテーマでなくて、全く違うテーマでアクションリサーチをできるような方法の開発をしてほしいなど。例えば、芳賀先生のところで細かな記録が作られた。それをまとめるための方法があるといいなということを使ったのであって、研究として成り立たせるためにはそこが必要ですよといったつもりなんです。

秋山 方法論の開発ですよ。

会場 そうです。

袖井 もう一人どうぞ。

会場 私もアクションリサーチもどきのことをやって失敗したり、時々成功したりといつももがいているんですけども、先ほど行政との連携の難しさということで話が出ましたが、私は今の行政はかなり地域づくりとか特にソーシャルキャピタルの醸成ということで、いかに住民のパワーを活用するかとかサポーターの養成ということで、逆に大学とか研究部会にオファーが多いと思うんですね。各自治体のニーズに合うような介入、あるいはアクションリサーチを提案すれば、必ずしもお願いでうまくいかないものでもないと思うんです。課題の設定だと思うんですが、ただそこでいつも私らもオファーはあるのですが、オファーは中途半端なんですね。例えば、本来なら 10 回とか 20 回とかある程度長丁場でやらなければならないものを 3 回完結でお願いしますとか、予算は 5 万円内をお願いしますとか、保健師さんはこのくらいしかできませんとか条件が出てきますので、そのところをお二人の先生が座間と養父でやられた時に、行政と白と黒ではなく、どこまでは行政がやって、どこまでは研究者がやるかというその辺のバランスが難しいかと思ったのですが、その

あたりご経験で行政とのバランスのとり方とかありましたら。

芳賀 確かに行政のニーズに適ったテーマを持っていけば入りやすいというのはあるかもしれないですね。行政の方とどういう風にあたりをつけるのかというのが大事なんですね。多分我々研究者も最初の段階では研究の展開を具体的に整理できていないというのがありますので、なおさら、行政の方はどういうプロセスを経るのかわからないということがあります。ですからお願いする時にこの計画は具体的にこんなことをお願いしたいというように提示すべきではないかということがあります。そんな中で望むらくは行政に一人でも意欲的な姿勢をもっている人がいて欲しいわけですが、そのことをやるには既存の、例えば介護保険課や健康推進課の担当者が兼ねるのではできないのではないかなと思います。その責任者の方がこのプロジェクトを担当するのであれば、かなりその時間を取れるような組織というのを先に約束していただけたらその担当者もやりやすいのではないかと思うんですね。その基盤づくりからお願いできれば本当はかなりじっくりと仕事ができるのではないかと思います。

袖井 ありがとうございます。かなり時間もオーバーして大変盛り上がってきましたが、残念ですけど、これで終わらせていただきたいと思います。ご協力ありがとうございました。非常にたくさんの方に来ていただいてありがとうございます。RISTEXのプロジェクトは、うまくいきましたパチパチというわけではなく、実は3ヶ年計画のうち皆さん大体2年間は紆余曲折していて、ほとんどのプロジェクトが最後の年に一気に進んでいます。ということをお考えすると、コミュニティにおけるアクションリサーチというのは非常に長丁場ですね。ですから行政のような、あるいは科研費のような数ヶ月で結果を出してくださいというのにはアクションリサーチは向かないですね。RISTEXのように長期的に研究費を出してくれるところがもっと増えればいいなと思います。本日はありがとうございました。